寄稿

夢のたねを見つける

松尾久美
（団体代表）

タイとの出会い

夢のたねを見つけた気がしたのは二十歳のときでした。当時、学生だった私は、初めての外国であるタイで、山村の暮らしののびやかさに心打たれ、子どもがこれだけ安心して過ごせる空間が日本の子どもたちにもあったらいいなあと思ったものでした。地域で中学生にかかわる活動をしていた私は、子どもが生き生きと過ごしているように見える世界の存在に衝撃を受けたのです。その時のぼんやりとした願いのような想いが、私にとっての「夢のたね」でした。

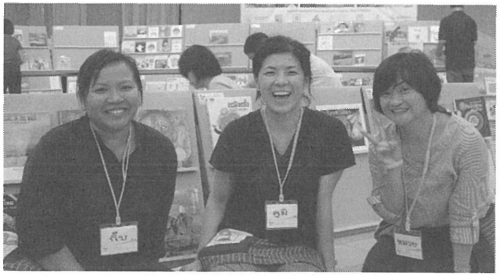
それから、はや二十年、現在はタイで子どもにかかわる大人を応援する活動をしています。タイ人の仲間二人と出会い、二〇一三年に「マレットファン（夢のたね）」というNGO団体を設立したのです。先生や保護者に対して研修、交流の場を提供したり、絵本の普及活動をしたりしています。

今回は日本人である私がどうしてタイの仲間と共に活動しているのか、また、私たちが事業の対象とする、タイの子どもにかかわる大人の状況について紹介させてください。

松尾久美（まつお くみ）
タイ教育支援 NGO マレットファン（夢のたね） 共同代表。
兵庫県尼崎市出身。2004 年よりタイの NGO 活動に参加、
2013 年に当団体を設立し今に至る。

視点の豊かさは優しさ

まず、共に活動する仲間の名前はムアイとギップです。二人とも、タイ最大のスラム「クロントイ」という地区で生まれました。高校に通う頃、当地区で支援活動を行っていた日本のNGOの活動に参加し、他のスラム地区や地方農村、さらに少数民族の子どもたちと、絵本や人形劇を通して触れあうようになります。自分のように困難な境遇にいる子どもたちでも、きっかけさえあれば、自分の好きなことに出会って努力していけるのではないか、そのきっかけづくりをしたいとこの活動を選んだそうです。



▲（左から）ギップ、松尾、ムアイ。

私が二人と出会ったのは、彼女らと同じ団体に参加することになったからでした。二〇〇四年末、タイ南部で起こった大津波の被災地支援で二年間ほど共に生活をしながら、子どもが安心して過ごせる居場所としての図書館づくりに没頭しました。活動を通じて、二人の物腰の柔らかさ、子どもたちの心を自然にほぐす力に、感心させられること、学ばされることが多くありました。

子どもとのかかわり方だけでなく、人と出会うときの優しさは、視点の置き方が豊かなところからきているようでした。タイ南部は陸続きでマレーシアと、海伝いにミャンマーと接しています。最も多く津波被害を受けた三県にまたがる活動をしていましたが、その中にはムスリム、ミャンマー移民労働者、海の上に暮らす少数民族など、タイ族以外のマイノリティーの集落がありました。タイ社会の中で孤立しがちなグループであり、被災後も、支援を受ける状況に差が生じていました。

▲絵本普及活動の様子（南部ヤラー県で）。

社会への諦めから、タイ人に対して拒絶反応を示す方も多くいました。それでも二人は笑顔で働きかけ、まずは相手を受け入れようとする姿勢があるのです。ムスリムのおばさんに素っ気ない態度をとられても、「仕方ないよ、タイの人につらく当たられたことがあるのかもね」、図書館に来たミャンマーの少年が本にいたずらをしても、「きっと気にかけてほしいんだね、うちの親戚の子も一緒よ」と。相手が違う言葉や文化をもった人であっても、大変な境遇に想いをはせる視点が豊かなこと、それに伴う共感力に驚かされることが多くありました。当時まだタイ語がうまく話せなかった私が活動を継続できたのは、この活動へのやりがいはもちろんですが、二人のしなやかで優しい共感力に助けられていたのです。

被災地で二年ほど過ごし、その後も各地での事業に携わった後、三人で団体を立ち上げることになるのですが、その経緯は、私たちをよく知る児童文学作家、村中李衣さんによる『マレットファン　夢のたねまき』（新日本出版社　二〇一六年）で楽しくご覧いただけます。

交流から夢のたねを

経済発展を遂げたタイにおいて、全般的に教育への関心度は高まっています。富裕層においては早期教育に注力するあまり、親子共に疲弊し、相談を受けることがあります。また、行政の指導要領にとらわれない理想の幼児教育を目指し私立幼稚園を設立した三～四十代の園長が、私たちの開催する研修に来てくださいます。中間層では、教育の質の地方格差や上意下達の伝統的価値観に沿った教育

システムに対する不満をもち、オルタナティブ・スクールや自宅学習を選ぶ保護者が増え、グループ研修を希望されることがあります。富裕・中間層とも、民間により、新たな教育観が模索されている最中のように見えます。一方、民族マイノリティーや移民などの貧困層においては、行政によるサポートが届かず、教育の質、量とも不足している状況がなお残ります。団体を設立して五年、富裕・中間層とも接する機会が増え、各グループの課題に気づくことになりました。課題もその解決策もさまざまですが、私たちができることとして、各グループへのアプローチと共に交流の場の提供が挙げられます。

違う環境、文化に触れて、新たに自分を発見すること、そこに交流の意義があることを実感してきました。「日本の保育を見て、自分が学んだ理論の実像がわかった、やっと本当のことを学生に伝えられる」と目を輝かせた幼児教育を教える大学の先生。「理想と現状のはざまで奮闘する同業者に出会い、日本の現状を客観視できた」と熱く語ってくれた日本の保育士さん。タイ人と日本人で始めたマレットファンは、違いを包括し肯定する団体として、タイの、日本の子どもにかかわる大人同士が出会い、学びあうことで各自の内にある夢のたねを見つけるお手伝いをすることが使命です。夢のたねを自分で発見し育てていこうと思える、そんなきっかけを生む活動を続けていきたいです。私の夢のたねも、初めてのタイで違う世界に触れたからこそ、見つけることができたのではないかと、二十年たって振り返ってみています。

▲バンコクでの研修の様子。